

香川県の茶主要 4 品種の一番茶について、成園化後 26 年間の生育および収量特性を数値データに基づいてとりまとめた。

1. 一番茶の萌芽期は「めいりよく」が最も早く、次いで「やぶきた」、「かなやみどり」、「おくみどり」の順で、それぞれ 4 月 2 日、6 日、8 日、13 日であった。そして、2 月後半あるいは 2 月後半~3 月前半の日平均気温が高いほど、「めいりよく」を除くいずれの品種も萌芽期は早くなった。
2. 一番茶の摘採日は「めいりよく」が最も早く、次いで「やぶきた」、「かなやみどり」、「おくみどり」の順で、それぞれ 5 月 3 日、5 日、7 日、11 日であった。また、「めいりよく」を除くいずれの品種も萌芽期が早くなると摘採日も早くなった。
3. 一番茶収量は「やぶきた」に比べ、「おくみどり」が多収、「めいりよく」、「かなやみどり」がやや多収であった。また、収量の年次推移は「やぶきた」では樹齢 20 年生をピークに、それ以降漸減した。他の品種でも樹齢 20 年生あるいは 15 年生以降には漸減傾向であった。
4. 収量構成要素の一つである摘芽数は「かなやみどり」、「おくみどり」が「めいりよく」、「やぶきた」より多かった。また、摘芽数の年次推移は「やぶきた」では樹齢 15 年生をピークに、それ以降漸減傾向であった。「めいりよく」を除く他の品種もほぼ同様であった。百芽重は「めいりよく」、「おくみどり」が大きく、次いで「やぶきた」、「かなやみどり」の順であった。
5. 収量構成要素と収量の関係から、「めいりよく」は芽重型に、「やぶきた」、「かなやみどり」、「おくみどり」は中間型に分類された。
6. 以上のことから、「やぶきた」に比較して優れるのは、早晚性の面では「めいりよく」と、収量性の面では「おくみどり」と考えられた。しかし、昨今の茶価の状況を勘案すると、生葉売りでの収益性の向上という観点からの品種組み合わせとしては「めいりよく」、「やぶきた」が有望と考えられた。

キーワード：「めいりよく」、「やぶきた」、「かなやみどり」、「おくみどり」、樹齢、生育、一番茶収量